

## 特集 5



## メキシコ グアナファト大学

宮西 賢次 (留学生センター長)

留学生センター長としてのこの二年間の在任期間中に私が契約締結に携わった大学は、啓明大学（韓国）、大田大学（韓国）、グアナファト大学（メキシコ）、東北財経大学（中国）などである。今回は、二〇〇四年八月に本学と学術交流協定を締結したグアナファト大学の概要を紹介するとともに、今後の学術及び学生交流活動の方向性についてご報告させていただきます。

グアナファト大学（正式名称はUniversidad de Guanajuato）は、ユネスコの世界文化遺産にも登録されているメキシコ中部の高原都市グアナファト市に位置しており、中世の佇まいを彷彿とさせる愛らしい街に溶け込むように存在している。銀採掘で古くから栄えたコロニアル調の歴史的な街並みは大切に維持管理がなされており、標高二〇〇〇メートルを超える高地らしく爽やかな気候にも恵まれた環境が、グアナファトの大学街を一層魅力的なものにしている。一七三二年、イエズス会によりEl Hospicio Escuela de la Santísima Trinidadとして設立され、その後一八二八年にEl Colegio del Estado（州立大学）、さらに一九四七年に総合大学となり、現在ではメキシコで上位三大学に数えられる社会的評価を得ている。

メキシコを代表する公立大学として、一、全人格的人間形成、二、民主的・公平かつ自由な社会の形成と確立に貢献することを目的とした知識の構築・涵養・共有を使命とし、教育理念としては、一、異文化と共存しつつ的確かつ有効に機能しうる資質、二、グローバル市場での十分な競争力、三、深い道徳心と地域社会に対する使命感を掲げている。これらの理念は、高度専門職業人教育に焦点をあてている点で、本学の教育理念とも軌を一にしていると言える。総合大学としての名にふさわしく、約二万人の学生が在籍しており、うち修士及び博士課程の在籍者は約二〇〇〇人となっている。北米の五十一機関、欧州の四十二機関をはじめ、世界一一九機関と交流の実績を有している大学でもある。主要分野は、一、化学・生物学・数学・物理学・農学などの

自然科学、二、鉱業学・地学・都市工学などの工学、三、経済学・経営学・社会学・文学・歴史学・語学、とりわけ本学との共通分野である会計・経営・国際貿易・法学・人的資源管理など、四、芸術・建築学・デザイン、五、医学・栄養学・心理学・看護学などの健康科学などである。会計・経営管理・人的資源管理などは修士課程のプログラムも有しており、生物学・医学・光学・化学・物理学・機械工学などの分野には博士課程のプログラムを設置している。本学との関連性が強い重要なプログラムとしては、会計・経営管理・経営科学・生産管理・情報システム・経済学の学部プログラム、及び修士課程の会計・人的資源管理・企業成長などがある。

グアナファト大学との学術交流協定締結の決断に至った理由は、以下に述べる四点に集約される。第一に、前述の通り、グアナファト大学はメキシコ全土で三指に入る名門大学であり、とりわけ経済学や経営分野での教育研究面での国内外での評価が確立している。また、グアナファト大学から本学の博士前期課程に進学した学生は学力人物ともに極めて優秀であり、今回の学術交流協定締結に際しても積極的な役割を果たしている。これらの点から、本学との学術及び学生交流を推進する拠点として十二分の力量を備えていると判断される。

第二に、グアナファト大学は、国際性を重視する教育理念を踏まえ、言語及び語学教育に対してかなりのウェイトを置いている。世界各国から語学研修の学生を受け入れ卓越したトレーニングプログラムを提供していることから、第二外国語としてのスペイン語教育にも力を入れる本学の学生が留学生活



を体験するのに適した理想的環境が整っている点で極めて魅力的である。訪問時に特に感銘を受けたのは、Language Centerと呼ばれる多言語学習支援室である。ワンフロアーに多様な言語のブースを設け、一般的な語学教材に限定されず、各国言語と文化を学ぶための様々な媒体が取り揃えられている。そこで学習している学生の国籍は実に多様であり、国際性豊かな空間の創出に成功しているように思われた。このような空間で言語的トレーニングを積むことにより、異質な文化や言語に関する直感的センスが養成されるのであろう。本学経済学部でも、すでに学習支援室を導入し新たな学生支援のあり方を探っているが、米国にも見られない欧州式のユニークな語学教育方法は、本学で見習うべき点も多いと感じている。

第三に、グアナファト大学との交流の経験を生かすことで、将来的にはメキシコ大学院大学(正式名称はEl Colegio de Mexico)との研究交流や交換留学制度の確立が可能となり、スペイン語圏における教育研究基盤の確立につながるが見込まれている。とりわけ、共同研究プロジェクトを推進する場合には、メキシコ最高水準の研究拠点とのパートナーシップの確立は極めて魅力的である。

第四には、現在グアナファト大学で検討されている国際ビジネス(MBA)のジョイント・ディグリーの可能性である。この制度は、テキサス大学ダラス校(米)、ラ・ロシェル大学(仏)、グアナファト大学などで協力し、双方で大学教員を派遣し英語での専門講義を提供することを通じ、各大学に在籍する学生が自大学の学位と並行で共通学位を取得できるという仕組みである。滋賀大学経済学部に対しても、このプロジェクトへの教員派遣の呼びかけがあった。想定されているのは、ファイナンス・会計などを含む経営管理・経済学・国際法などの分野である。現時点では、各国法制度上の差異の調整作業が残されているが、異文化に精通した実業人の養成に効果的なプログラムであることから、本学の積極的参加は検討に値する。

以上がグアナファト大学との契約締結理由の概要であるが、最後に滋賀大学の国際交流活動の将来の方向性について若干私見を述べたい。すでに言及したように、グアナファト大学は世界一九機関と交流協定を結んでおり、滋賀大学が国際交流協定を結んでいる大半の大学も、ほぼ同様の状況にある。残念ながら我が国の国立大学法人の多くは、このような取組の点で非常に貧弱であると言わざるを得ない。本学の場合、この数年間に新たな交流協定の締結に努め、ミシガン州の十五大学を中心とした北米、グアナファト大学によるラテンアメリカをはじめ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリアの主要な言語文化圏で評価の高い大学との交流契約を結びつつあり、二学部体制から生じる規模の制約(組織体制及び人員に関する制約)を前提とすれば、この方面では相応の成果を上げていると言える。

しかしながら、本学の多様な研究者による学術研究推進の面でも、学生の交流を通じた教育文化的国際交流の面においても一層多様な大学との交流関係を深める必要がある。とりわけ、本学の教育理念に掲げられている国際性豊かな人材を輩出するための教育研究環境の創造に向けた努力が今後も必要であり、そのためには以下で述べるいくつかの観点からの改善が期待される。

第一に、学生交流協定に基づく交換留学制度を活用する場合に、双方向性をいかに確保するかということが問題となる。とりわけ、北米、オーストラリア、ヨーロッパの大学との学生交流協定締結が、困難であるのは、



相手方大学から滋賀大学への留学生の確保が容易ではない点にある。一時期に比べ日本文化や日本経済に対する関心が薄れてきつつあることも背景理由として挙げられるが、それ以前に、カリキュラムやプログラムを含む教育内容に関する国際的評価が低いことが深刻な問題である可能性がある。魅力的なカリキュラムの提供はもちろん、英語による講義の提供、充実した語学・文化研修プログラムの導入、国際的に承認される講義の提供が、今後の課題であると言える。あるいは技術的な観点では、JCMU(Japan Center for Michigan Universities)からアメリカ人学生十名から二十名を受け入れて実施されているJEB(Japanese Economy & Business)の講義提供と交換に、日本人学生若干名を一学期間ミシガン州の大学へ留学させるというような、独自の均衡条件確保の方法についてもいわゆる国立大学法人化後は弾力的に活用していく必要がある。

第二に、戦略的観点から海外の重要なパートナーを開拓し、交流計画の策定、契約締結を迅速かつ効果的に実施するには、現在の留学生センター体制では困難なことも多い。国際交流を積極的に推進している海外の大学と比べると、現状では国際交流部門の組織体制とエキスパート育成の両面で不十分であると言わざるを得ない。このような問題はすでに以前から認識されており、平成十八年度の国際交流センター開設に向けて、必要な組織体制の検討に着手している。さらに、大学が研究面での差別化と研究拠点の形成を迫られている状況下で、滋賀大学の研究者にとって有意義なパートナーを開拓し組織的研究成果を生み出していくためにも、国際交流センターのイニシアチブと支援がなくてはならないものとなる。このような観点からは、国際交流機能、留学生センター機能、日本語・日本文化教育機能の三つを有機的に組み込んだ国際交流センターの導入が最重要課題であり、新たなセンターが教育研究拠点形成の支援センターとして今後更に重要な役割を担うべきことは明白である。